先輩と俺（仮題）

烏天狗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
先輩と俺（仮題）

【Ｎコード】
Ｎ２９４０Ｚ

【作者名】
烏天狗

【あらすじ】
天啓の如くひらめいた行き当たりばったりなオリジナル小説。
無意識にいろんな小説をパクっていると思います。気が付いた方はぜひ、ご指摘ください。
めずらしく、プロットもたてつつ、同時進行で本文を書いていたりします。
他の２作品も執筆しながらですが、よろしくお願いします
あれ？　あらすじじゃない？　まぁ。いいか

1（前書き）

とりあえず、区切りのいいところまで。

1

『廊下は走るな』
どこの学校にもありそうな基本的な校則だ。
確かに狭い廊下でむやみに走っては人にぶつかったりして危ない。
ましてや高校1年にもなって走り回るような奴は一部の元気が有り余っている連中を除いていないと思う。
「はぁ、はぁ。くそ！」
俺、藤堂雪はそんな連中とは違うが、現在、板張りの校舎の中を爆走中である。その理由は単純明快。
「コラー！！　雪！！　あたしが作ったお弁当が食べれないとは一体どういう了見だ！！」
鬼神の追手、いや、幼馴染の中川冬希に追いかけられているからだ。
「幼馴染の女の子が、手作りのお弁当を、わざわざ作ってきてやったんだぞ！　泣いて喜ぶのが普通だろうが！！」
そう。冬希は俺のために弁当を作ってきてくれた。両親が共働きで毎日、購買かコンビニのお世話になるしかない俺を見かねて作ってきてくれたらしい。普通なら笑顔で受け取り感謝するところだろう。普通ならな。
「てめぇの料理はぁ！　某国もびっくりな化学兵器なんだっての！！　命がいくつあっても足らんわ！！」
「な！　きょ、今日のは見た目はまともだぞ！！」
「余計にタチが悪いわ！！」
そう。冬希が作る料理はヤバイ。美味い、不味いではなくヤバイ。恐らく料理の腕だけなら確かなんだと思う。一度だけ、作っているところを覗いたが包丁使いなんかは手馴れたものだった。しかし、ヤバイ。どんな料理でも冬樹の手にかかると化学兵器にクラスチェンジしてしまう。

中学生のころ、初めて冬樹の手料理を食べた。そのころはまだ拙く見た目もあまりよろしくないものだったが、幼馴染の女の子が作ってくれた料理、当時の俺は喜んで食べた。
瞬間、視界が暗転した。味は覚えていない。次の瞬間には視界が明るくなり俺は花畑にいて、一本の川を挟んだ向こうにじいちゃんがいた。
死んだはずのじいちゃんが。
「一口で臨死体験できる料理を作れんのはある意味才能だと思うぜ！」
「あ、あれは昔のことだ。だんだん、上手くなってきてるだろ！」
「食わされるたびにじいちゃんの追い返される俺の身になってみやがれ！　この前なんかじいちゃん、川のこっち側にきてお茶出してくれたぞ！！」
おそらく、たぶん、きっと、冬樹の料理はまともになってきているのかもしれない。しかし、高確率で故人に会えてしまう料理を好き好んで誰が食いたがるか。あ、恭一郎なら食べるかもな、あいつ冬樹のことが好きだし。
「とにかく、止まれ！！　そして食え！！」
「断る！！　俺はカレーパンと牛乳で幸せなんだぁ！」
「ほほぅ、なら、仕方ないね。いつもの通り実力行使で行くよ！」
冬樹が走るスピードを上げた。俺も負けじとスピードを上げる。部活に所属しているわけではないが、毎日のように追いかけっこをしているおかげで逃げ足だけなら自信がついた。しかし、逃げ切れる確立はそんなに多くない。
冬希は現在、陸上に所属して一年の部員の中では群を抜いた実力を持つ短距離のホープ。加えて実家が古武術道場をやっており、幼い頃から超がつくほど親馬鹿なくせに稽古だけは鬼になる親父さんに鍛えられていて、腕っ節は最強。この前はかつあげされていた子を助けるために不良5人と大立ち回りを演じて全員叩きのめしたんだっけか。一緒に習っていたとはいえ、才能皆無の俺なんかが敵う

わけがない。つまり捕まったら終わりなわけだ。
「おーう、雪じゃん、また鬼ごっこか？」
「恭一郎！　いいところにきた！　あと頼むわ！」
「あ、なにすんだ！」
曲がり角から出てきた菅原恭一郎の腕を掴み、後へ飛ばす。
「おぉ！　冬希さん！　今日もお美しい！」
「邪魔」
「ぐべぇ！」
冬希の前に出された恭一郎が一撃で吹き飛ばされた。使えない奴。お、足にしがみついた。あ、踏まれた。なんだかんだで足止めになってるな。ありがとう、恭一郎。君の活躍は次の角を曲がるまで忘れない。
「こら！　廊下を走るんじゃない、って藤堂か」
「遠野先生！」
次の角を曲がったところで禿頭でサングラスをかけた逞しい教師が現れた。生活指導担当の遠野吉宗先生だ。ちなみに服装はきっちり着込んだ黒のスーツ。ぱっと見でＹＡＫＵＺＡな人に見える。
「また、中川か？」
「また、冬希です」
「そうか、お前も苦労しているな。まぁ、任せろ」
「いつもありがとうございます！」
遠野先生の横を通り、さらに逃げる。遠野先生は俺に同情してくれている。実はあのなりで生活指導のほかに家庭科を担当しており、そのついでで調理部の顧問をしている。ある日、調理部員に混じった冬希の料理を食べてしまい、三途の川にご案内されたわけだ。それ以来、遠野先生は俺の味方だ。
「こら！　中川！　廊下は走るな！」
「げ、遠野」
「遠野先生と呼ばんか！　馬鹿者が！　指導室に連れて行かれたいのか！」

さすがの冬希も遠野先生を殴り飛ばすことはできなかったようだ。足止め成功。
「今日は逃げ切れたな」
また一日生き延びた。あとは昼休みが終わるまで待っていれば安全だ。
「っといつの間にか部室棟の４階まできちゃったか」
文科系の部活が集まる部室棟。元々、文化部はあちこちに分散されていたが、新校舎が建設されるにあたって旧校舎を部室棟として利用することにしたらしい。
「ゆ～きぃいいいい！！　みーつけた！」
「うえぇえ！？　冬希？」
ぽてぽてと部室棟の中を歩いていると世にも恐ろしい怒号、まるで獲物を探す鬼のような声が聞こえてきた。窓から見下ろすと渡り廊下にいる冬希。まさか、遠野先生を突破してくるとは、今日の冬希は一味違うようだ。
「って、そんな場合じゃない！」
この部室棟、本来なら渡り廊下がふたつあって新校舎と旧体育館に繋がっているのだが、そのうち旧体育館に繋がっている渡り廊下が老朽化のせいで先日崩壊していて、今は通行禁止になっていたりする。真実は冬希との追いかけっこの果てに捕まったときにせめてもの抵抗をしたところ、冬希が放った拳が柱に命中、老朽化していた渡り廊下が崩落したというわけだ。ちなみに今、逃げてきたのは新校舎からである。
「袋のネズミじゃん……」
冬希は新校舎の渡り廊下からすぐにもここまで来るだろう。退路はない。
「か、隠れなくちゃ」
幸い、ここは部室棟。教室は腐るほどある。
「あ、開かねぇ！？」
手近な教室に逃げ込もうとするとばっちり鍵がかかっていた。次

の教室も同じ。おのれ、文化部のくせに施錠が完璧じゃねぇか。
「ゆ～き～可愛い幼馴染がい～ま、い～く～よ～」
怖。既にホラーだ。冬希も俺を追い詰めたことを知っているのだろう。楽しそうに笑いながら近づいてきているようだ。くそ、どうして旧校舎は片側にしか階段がないんだ。今から降りたら鉢合わせする可能性が高い。
「お、開いた！」
祈りを込めて一番端にある旧図書室の戸に手をかけると奇跡的にノブが回った。すぐさま体を滑り込ませて戸を閉める。それと同時に誰かが階段を駆け上ってきた音が聞こえた。もちろん、冬希だ。
「雪！　ここにいるのはわかってるんだからね。今すぐ出てきたら自分で食べることを許してあげる！」
つまり隠れていたら無理やり食べさせると。どのみち食わされるじゃないか。当然、無視を決め込むと冬希は教室をひとつひとつ調べ始めたようだった。とにかくここの鍵をかけなくは。
「あ、あれ？　鍵がない！？」
戸のノブには鍵をかけるための機構が備わってなかった。つるんとしたノブがあるだけだ。
「だってここの鍵は外からしかかけられないもの」
「え？」
俺以外の声が後から聞こえた。冬希の声だったら絶望するところだったが違う。そして振り向くと、女子生徒がひとり、椅子に座って文庫本を広げていた。

1（後書き）

すらすら書けたものの、だんだん文章が崩壊しているような・・・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2940z/

先輩と俺（仮題）

2011年12月10日13時46分発行